

豊かな絵本・本・ メディア環境の実現に向けて

～『子どもと絵本・本に関する研究』のこれまでの成果から～

—発達心理学の視座から素朴に思うこと—

遠藤 利彦

(東京大学)



The Center for
Early Childhood Development,
Education, and Policy Research

東京大学Cedep共同研究



ポプラ社

×



東京大学

The Center for
Early Childhood Development,
Education, and Policy Research

株式会社ポプラ社×東京大学Cedep 共同研究プロジェクト 「子どもと絵本・本に関する研究」

株式会社ポプラ社と東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター（以下、東京大学Cedep）は、子どもを取り巻く読書環境の改善を目的とし、“本”の価値を科学的なアプローチで明らかにする「子どもと絵本・本に関する研究」プロジェクトを2019年8月より、共同で行っています。

ポプラ社では「ひとりでも多くの子どもたちを本好きにしたい」という想いから、今こそ“本”の価値を科学的研究の見地から見直すべきと考え、乳幼児や絵本に関する知見が豊かで、産官学との協創探究を目指す東京大学Cedepと、この共同研究に取り組んでいます。

本研究では、子どもの発育発達プロセスにおける絵本・本の固有性や、認知能力・非認知能力の発達への寄与の可能性、保育園・幼稚園での絵本をとりまく環境などを、科学的アプローチによって明らかにしていくことで、デジタルメディア時代の絵本・本の新たな価値を発見し、その研究成果を広く社会に向けて発信することで、未来の子どもたちにより豊かな読書環境を提供することを目指してまいります。

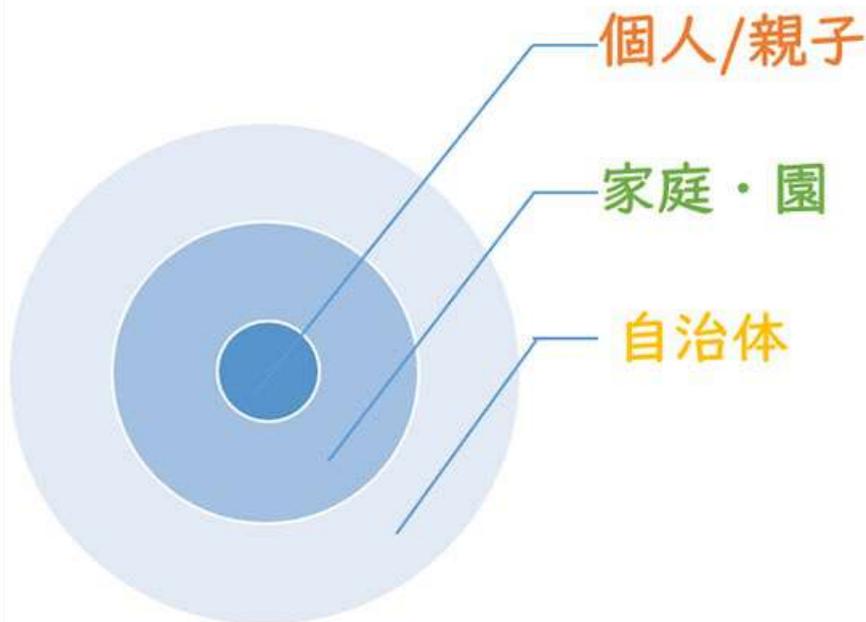


▲（左から）東京大学教育学研究科Cedep:野澤祥子、東京大学教育学研究科長:秋田喜代美、株式会社ポプラ社代表取締役社長:千葉均、東京大学教育学研究科Cedepセンター長:遠藤利彦

子どもを取り巻く絵本・本環境を多層的・多面的に研究し、 絵本・本の新たな価値の発見と生成、環境改善を目指す

中核的な問い：

- ①絵本・本には子どもや親子にとって固有の意味や価値があるか？
- ②家庭や園における絵本・本の量や環境の質には、多様性や格差があるか？それは子どもの発達に影響するか？
- ③絵本・本に関する環境づくりに関して参考になる園や自治体の先進事例が国内外にあるか？



①実験研究

- 絵本・本と動画等他のメディアに対する子どもの反応の違い
- ※行動、視線、脳波等

②調査研究（家庭・園）

- 絵本・本の量・種類
- 絵本・本の環境構成（置き方、提示方法）
- 絵本・本の入手方法、予算配分
- 読み方等の発達的变化
- 他のメディア環境

③事例研究

- 絵本・本の環境づくりに関する園・自治体の先進事例
- 絵本・本環境づくりに関する海外の先進事例



絵本・本・デジタルメディア

それは遊びの外側にあってはならない

それは遊びの外側にあってはならない

- 子どもはあらゆるものをおもちゃにして遊ぶ
- 絵本・本・デジタルメディアも基本的には同じ
- 好奇心の的になり自発的遊びの展開を促す
- が、大人が遊びと学びを不自然に分断し、それを専ら教育のツールとして活用しようとする
(←PISAショック)時、本来の価値は大幅に低減する
- 殊にGIGAスクール構想の前倒し状況の中、乳幼児のスマホ・タブレット使用がただ「就学準備」として拡がることへの懸念・対処の必要

- 学校教育のICT化・デジタル化が一般化するとそれが社会の標準・価値観になってしまう
- 「学校でしているんだから悪くはないはず」
→社会全体のデジタル化にいつそうの拍車
→デジタル教育の低年齢化を加速化!?
- が、現実には十分な科学的根拠なく進展・普及
- 読書時間の短縮・スクリーンタイムの増加は、子の心身発達に負に作用する危険性を有する
- 中長期的視座でデジタル化の効果と同時に弊害を科学的に検証していく必要:そして、弊害があれば、止める、捨てる覚悟と勇気が必要



絵本・本・デジタルメディア

その中にすべてがあってはならない

その中にすべてがあってはいけない

- 絵本は「絵本すること」だけをアフォードする
- スマホ・タブレットはあれもこれもアフォードする
(動画/写真/ゲーム/デジタル絵本/通話/情報探索……)

→ 実行機能未発達の子の注意・集中に負の影響

- 絵本の汎用型ではない用途限定の素朴・シンプルさの意義・効用を再確認・再評価する必要性
- そこにないからこそ、子どもは時に実際に物理的な世界に探索に出かける
- 実体験としての全感覚・具体的な運動や他者との会話等を通じた学びを支え・促すことの意義

紙絵本は実は究極の「デジタル」

- 紙絵本→アナログ vs. 電子メディア→デジタル
- でも情報の離散性という意味では紙絵本は究極のデジタル(特に頁間には大きな情報断絶)
- 「不在」の逆説: 不可聴・不可視→それを子どもなりに補おうとする・能動的に読む・作る・語る
→ 想像性・創造性・伝達への動機づけ・工夫等
- 「情報接続」・「情報補完」→ヒトの知性の根源
- 物理的にはシンプルで素朴であることが、発達的には豊かな結果を生み出すというパラドクス

東京大学Cedep×株式会社ポプラ社 共同研究プロジェクト
オンラインセミナー「デジタル時代の子どもと絵本・本」シリーズ



第3回 脳科学から考える デジタル時代の子どもと読書



登壇：酒井 邦嘉（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
佐藤 賢輔（発達保育実践政策学センター 特任助教）
遠藤 利彦（東京大学大学院教育学研究科 教授）

2021年11月5日(金) 14:00~15:30

- 参加費は無料です。
- 本セミナーはオンライン（Zoom）で開催します。
- 参加には事前の申し込みが必要です。
- ライブ視聴の定員は先着1000名です。

企画趣旨

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(Cedep)とポプラ社の共同研究「子どもと絵本・本に関する研究」プロジェクトによるオンラインセミナー「デジタル時代の子どもと絵本・本」シリーズ、第3回は、酒井 邦嘉先生（東京大学大学院総合文化研究科）を講師としてお招きし、本の特徴としての紙や見開きの効果を検証した最近の脳科学研究の知見をまじえながら、デジタル時代の読書と言語発達の関係や、デジタル時代における教育のあり方についてご講演いただきます。

また、Cedepの佐藤 賢輔特任助教から、ポプラ社との共同研究の一環として実施した、紙の絵本とデジタル絵本を比較した研究について簡単にご紹介いたします。さいごにCedepの遠藤利彦センター長をまじえたディスカッションを通じて、デジタル時代における、より豊かな読書環境を実現するための手がかりについて考えていきます。みなさまのご参加をお待ちしております。

プログラム

*プログラムは変更となる場合がございます。

講演

「デジタル時代の読書と言語発達」

酒井 邦嘉（東京大学大学院総合文化研究科 教授）

酒井 邦嘉



研究発表

「紙とデジタルどう違う?：親子による共同読み場面の比較実験」

佐藤 賢輔（発達保育実践政策学センター 特任助教）

ディスカッション

酒井 邦嘉 × 遠藤 利彦（東京大学大学院教育学研究科 教授 / 発達保育実践政策学センター センター長）



セミナーの詳細・お申し込みはこちら

URL <http://www.cedep.u-tokyo.ac.jp/event/36406/>

お申し込みは一人ずつお願いいたします。
お問い合わせについては、お返事までに数日
お時間をいただく場合がございます。

※セミナーの様子は録画配信いたします（一部プログラムを除く）。
配信のみご視聴する場合は申込みの必要はございません。
Cedepのウェブサイトから、どこからでもご覧いただけます。
※セミナーの資料は、セミナー終了後にCedepウェブサイトにて
掲載する予定です（一部資料を除く）。
※録画配信および資料公開の期間は未定です。

なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか



東京大学大学院総合文化研究科教授
酒井邦嘉
Sakai, Kuniyoshi

脳を創る読書

実業之日本社

- “More is more”

→必ずしもプラスに働くとは限らない

- “Less is more”

→創り補うことを通じた自律的発達

- 子どもはなければ求めるし、自分で想像し、創造もする。いやなら主張するし、自分で解決しようともする。子どものちからを信じよう。見まもろう。支えよう。促そう。

- 子どもにとって最高の玩具は棒きれ？

「作り手」視点と「読み手」視点

- デジタルメディアの可能性は大きい。しかし、それが同時に思わぬ陥穽にもなり得る。
- 様々な仕掛けを盛り込み、刺激性を強め得る
しかも、インタラクティブ（ただし、中途半端に）
→ 好奇心旺盛な子の注意・興味を一時的に喚起
→ が、時に過大な認知的負荷・刺激や情報過多
- 危惧すべきは「作り手」視点の暴走→「これもできる、あれもできる」: 作り込まれた子ども向けアプリ→注意捕捉・読み方の強制→用い方の自由度が低減→**読み手は受け身に/想像性の欠落**



絵本・本・デジタルメディア

それは一人使いから始まってはならない

- 子どもの知情意は、物理的環境と社会的環境両方との自発的・能動的関わりの中で培われる
- 「孤独な科学者」としてのPiaget型の遊び
- 「社交的な法律家」としてのVygotsky型の遊び
- 発達的には本来、両者のバランスが極めて重要
- しかし、近年の殊にスクリーンタイムを子どもが一人で過ごす時間の増大→バランスの崩壊
- 絵本は一つのトピックを二者がともに見、それについて会話するを支援促すツールとして機能
- 「二人使い」→意味ある「一人使い」/「集団使い」
→スマホ・タブレットの早期からの一人使いの怖さ

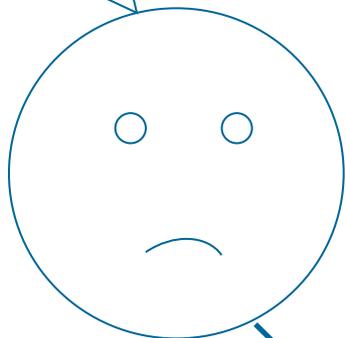
「並び見る」関係の中の絵本

- 見つめ合う(二項)関係→並び見る(三項)関係
- 「9カ月の奇蹟」: 三項関係が拓く発達的可能性
- 殊に日本文化では「共視」に特別な意味合い
- 「共同注意」: 知識・言語・共感性・心の理解・・・
- 「社会的参照」: 世界に遍在する社会的情報の活用→他生物には希な最も効率的な学習機序
- トピックとしての絵本→注意・情意共有の対象
- 絵本: 心的発話が豊かに交わされる(心的発話の豊かさ→後の子どもの心的理解能力を予測)

???

intradynamic

extradynamic



共同注意
(joint attention)

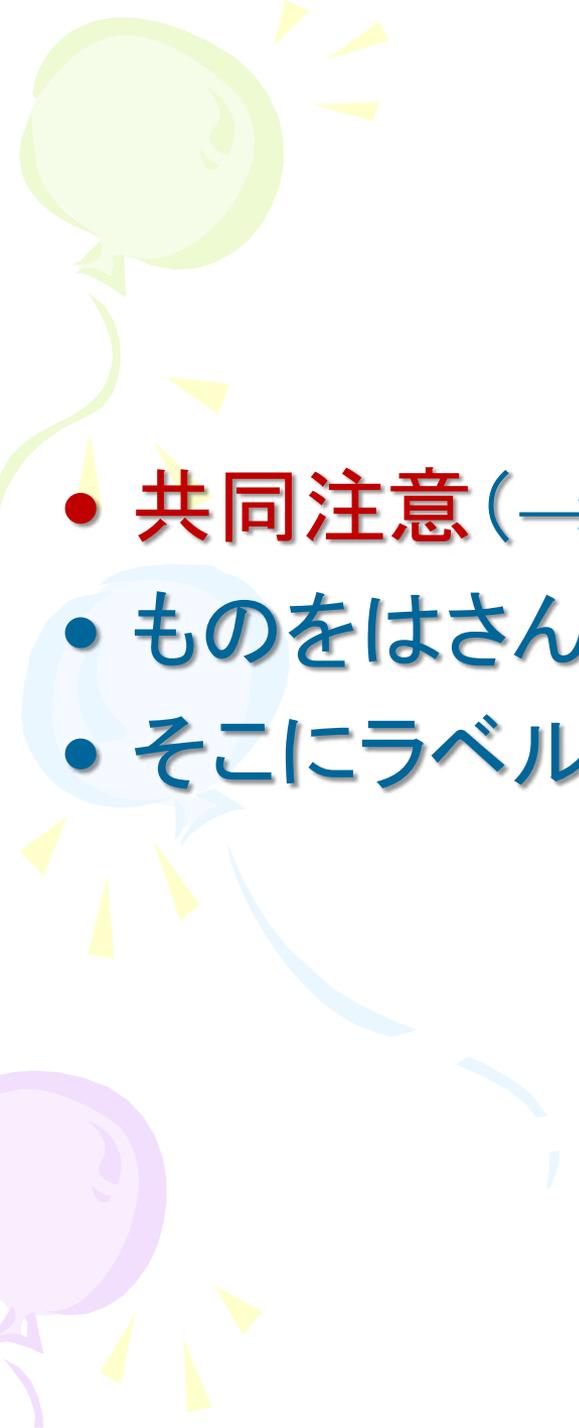
くっついたら、いろいろ
かわったねえ。

柔軟で臨機応変な
応答的環境

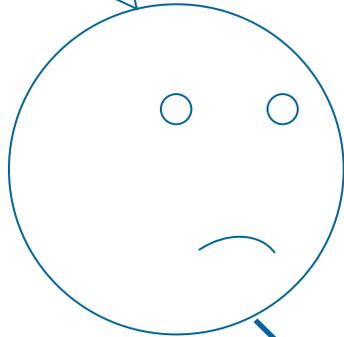
子どもが注意を向ける
未知なる対象に対する
ラベリング→語彙獲得



トピックを挟んでの
情動的交流・相互理解
→親子双方にとって魅力

- 
- **共同注意** (→指さし)
 - **ものをはさんでそれをトピックに心を通わす**
 - **そこにラベルが持ち込まれてことばが獲得される**

なんか不気味!
あの大きいの何?



やさしそうな、おばけね。

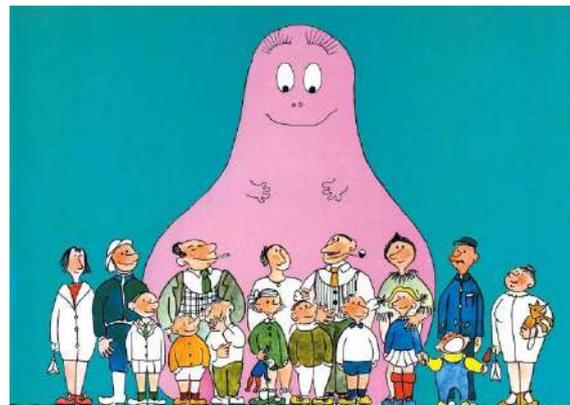


ニコニコ

社会的参照
(social referencing)

視線→「～について」
表情→「どんな気持ち」

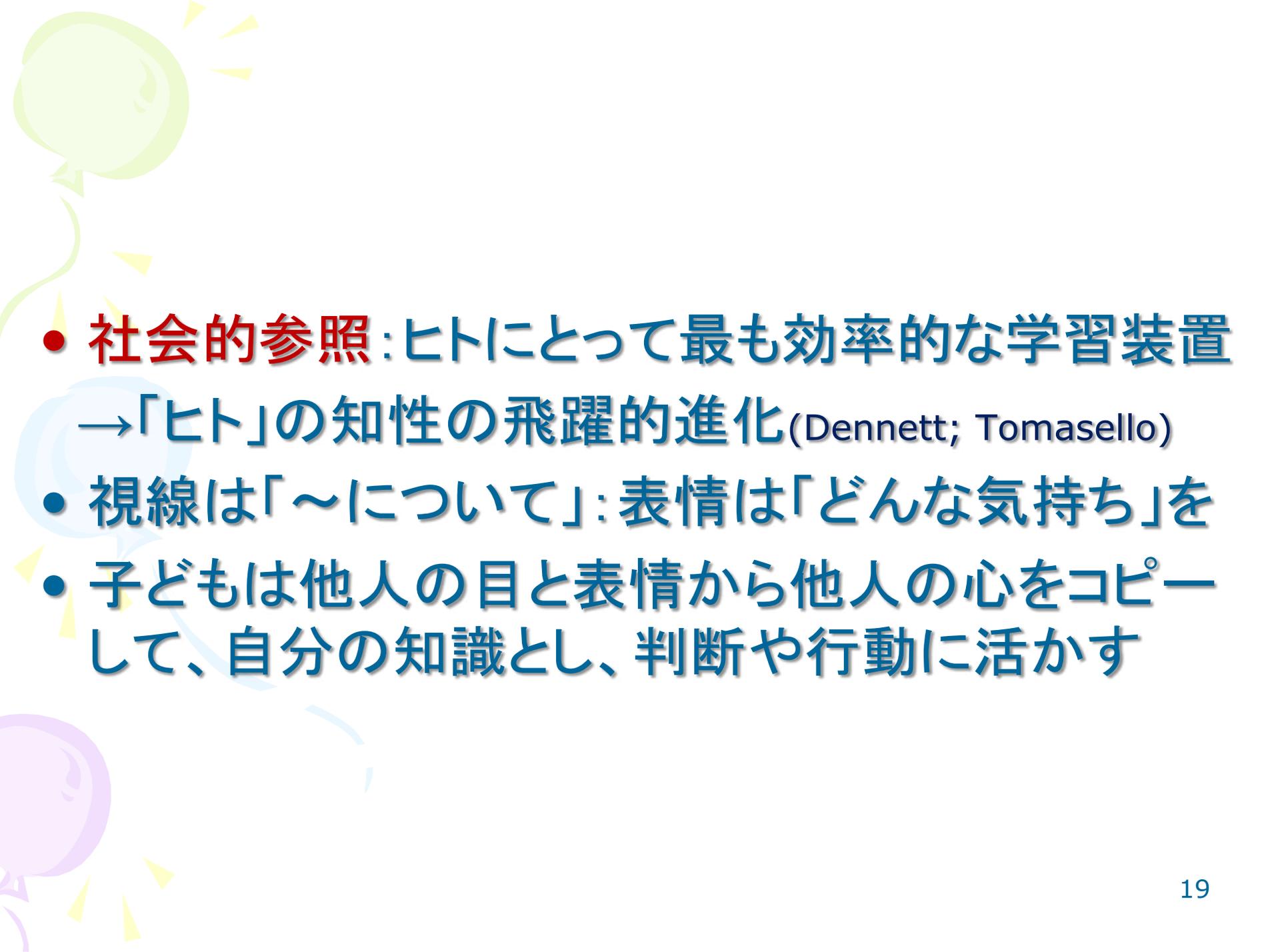
子どもは他者の視線と表情
から、他者の心(=評価等)
をコピーして、活用する
→最も効率的な学習



参照される側の養育者
→養護的感情の高まり

おばけのバーバパパ

よく/アネット・チゾンとタラス・テイラー やく/やましたはるお

- 
- **社会的参照**: ヒトにとって最も効率的な学習装置
→「ヒト」の知性の飛躍的進化 (Dennett; Tomasello)
 - 視線は「～について」: 表情は「どんな気持ち」を
 - 子どもは他人の目と表情から他人の心をコピーして、自分の知識とし、判断や行動に活かす

- 子どもは生まれながらの自発的な「**学び手**」
と同時によき「**教え手**」を自ら探そうとする存在
- 大人は生まれながらの効果的な「**教え手**」
子どもの学びの姿勢を直感的に察し、促し支える
と同時に豊富な情報を保有し、様々な手段で発信する存在
- ヒトは、子どもの側の学び手としての性質と、大人
の側の教え手としての性質を「**共進化**」させた

→ **“Natural pedagogy”**

(進化・生物学的基盤をもったヒトに固有の教えと学びの仕組み)

- 大人は「**顕示的手がかり**」を無意識に与え、直感的教育を行う
(アイコンタクト・対乳児発話・誇張動作・随伴的応答・名前の呼びかけ……)
- 子どもは「**顕示的手がかり**」に反応して、その大人から効率的に
情報を引き出し、獲得し、学ぶ (e.g.「**社会的参照**」)

切り替えではなく共存を

- 紙媒体・電子媒体それぞれの強みを「読み手の子ども」視点で最大化することが課題
- それも短期的視座（「おもしろそう、ほしい」→売れる）ではなく、**長期的視座（子どもの心身発達に適う）**をもって作り、提供していく工夫
- 学習型 / 図鑑型 / 物語型絵本……
- 一人使い / 二人使い / 集団使い……
- 「どちらがいい」はナンセンス
→「共存の形」を実証的に探そう！



絵本・本・デジタルメディア

それは与えるだけであってはならない

それは与えるだけであってはいけない

- 家庭や園における絵本・本（・デジタルメディア）環境の格差の大きさ
- それを是正するための施策の実現は急務
- とりわけ図書館が果たし得る役割は大きい
- ただし、活用できるリソースを増やし充実させることと、現にそれが有効に活用されることは別次元のことと把握すべき
- 当然のことながら、いくら良いものをたくさん与えても、本来それを使うべき人が使わなければ何の意味もない

- 子育て支援・ソーシャルサポート実践・子ども貧困対策等の効果に関する直視すべき現実
- サービス・体制等をいくら充実させても、期待されたほどの効果は得られない
- 当事者たる子どもや保護者の側が自らそれらを探し求め、活用しようとする動機づけを持ち、現にアクションを起こさなければ、無意味
- 活用者、殊に乳幼児期に関しては保護者が絵本や本等の有用性や図書館の利用価値等を理解し、それらを現に活用しようとする動機づけや行為をエンパワーする仕掛けが必要

- **短期的視座から見る方途**：絵本・本の活用に特化した支援ではなく、広く様々な包括的・持続的な子育て支援の中に常に絵本・本が在る状況を作り出していく（例えば図書館を包括的な育児情報提供・支援の場とし、従来、そこに足を運ばない保護者を呼び込む仕掛け……）
- **長期的視座から見る方途**：将来の親となる子どもの絵本・本・デジタルメディア等の価値や有効性に関する理解を（殊に園での実践を通して）涵養していく地道な試みを続ける→マクロシステムとしての絵本・本文化を変容させる